

講演 2

歯周疾患 —そのタイプと治療の進め方—

東日本学園大学歯学部歯科保存学
第1講座教授 小 鷲 悠 典

プラークは歯周疾患の原因として、きわめて重要である。プラークのコントロールが歯周治療を成功に導くための出発点である。歯周治療が終了し、メンテナンスにまで到達した場合には、再発しないように、歯周組織の健康を維持するために、口腔清掃を良好にしておく必要がある。

どの程度にまで、プラークをコントロールすれば良いか、という問題は我々歯科医にとって興味ある事項であるが、

- 1) 患者の体質に差があり、特に多形核白血球などの生体防御に働く細胞の数が少なかったり、機能に欠陥のある人がいたり、
- 2) 歯周病にも、大多数を占める成人型歯周炎の他にも、若年性歯周炎や急速進行性歯周炎等、いくつかの病型のあることが知られていて、それらは進行の速度や、治療に対する反応が異なる。

等、プラークと、歯周治療の効果との関係を厳密に評価するには難しい点もある。

しかしながら、歯肉縁上と縁下（歯根面）のプラークコントロールを行えば、著しい治療効果のあがることは、日常の臨床の大多数の症例で経験しているところである。また一方では、患者も努力し、プラークコントロールも一応のレベルに達し、歯科医も他の患者と同等以上の歯肉縁下のスクレーピングやルートプレーニング等、初期治療を行っているにもかかわらず、治療効果の上がりにくい症例も少数ながら存在する。

本講演では、

- 1) プラークコントロールは、どの程度にまで行えば治療効果があがるか、
- 2) 歯周疾患のタイプにより、歯周治療を進める上で配慮すべき違いがあるか、
特に、若年性歯周炎や急速進行性歯周炎のように、進行が早く、歯の喪失に結びつき易いと思われる疾患にどう対処すべきか

を中心に述べてみたい。

講演 3

高齢無歯顎患者における 補綴臨床の実際

東日本学園大学歯学部歯科補綴学
第1講座教授 平 井 敏 博

我が国における人口の高齢化は、他の先進諸国に例を見ないほどの速度で進行している。

高齢者の歯牙喪失率は非常に高く、失われた咀嚼機能を回復するための義歯補綴の役割は、身体的・精神的健康の維持の観点からも非常に大きいものといえる。われわれの教室の調査からも、高齢者における日常の咀嚼が精神活動と密接な関係にあることが示唆されている。しかしながら、老化による顎口腔系諸組織・器官の変化は義歯の維持・支持・安定に不利な状態をもたらし、さらに神経筋機構における協調性の低下とあいまって咀嚼機能の回復を著しく困難なものとしている。

高齢者に対して行われる無歯顎補綴の臨床も、通常に行われるそれと大きな相違はない。したがって、義歯によって機能的あるいは形態的に回復された状態が長期間維持され、同時に装着された義歯が顎口腔系の残存諸組織（顎関節、歯槽骨、残存歯など）に為害作用をもたらさないことを第一に考えて診療にあたるべきである。しかし、義歯の製作・装着に際しては、加齢あるいは全身疾患によりもたらされる顎粘膜、歯槽骨など床下組織にみられる変化や運動機能・神経機能の低下による咀嚼筋、顎関節、舌などのoral motor behaviourにみられる変化に対する配慮が必要とされ、義歯の設計や咬合関係の付与に関しては考慮されなければならない点も多い。

そこで今回は、高齢無歯顎患者における補綴臨床の実際について考えてみることにする。